ハワイを終の住処として選択した新一世高齢者―本土からの移住者を中心に―

Aged Shin-Issei who chose Hawaii as their final home: Focusing on mainland migrants

牧田幸文　　（福山市立大学）

MAKITA, Yukifumi (Fukuyama City University)

キーワード：　エイジング　日系社会　退職移住

1.研究の背景と目的

人生 100 年時代といわれる中、高齢期の過ごし方も多様化している。グローバル化が進む中で、欧米では、定年後に海外で快適な環境で老齢期を迎える人たちが増えている(Longino and Warnes、2005 538)。退職移住者たちは、新しい地域や国へ移り豊かな環境の下アクティブに暮らしている。彼（女）らの多くは、既婚カップルで定年後働く必要がなく、経済的な格差を利用して北ヨーロッパから南ヨーロッパのスペインやイタリアなどで暮らしている（King *et al.*,2000)。北米の場合は、アメリカのフロリダ、ハワイへ移住の傾向がある。日本人高齢者の海外移住についての研究はまだ少ないが、小野によると、フィリピンやマレーシアへのロングステイツーリズムがあり、観光とケア移住の実情が報告されている（小野、2020)。従来の労働移住とは別に、こうした高齢者の越境を含む移住は、観光と安い医療やケアを消費する、ベビーブーマーのライフスタイル移住として分類され（Sampaio, 2022)、新しい視点で越境する高齢者たちは分析されている。他にも高齢期の移住は、家族を中心とした社会関係と自身の健康とケアを重視したものがある。働き盛りの子ども世帯を助けるための孫のケア（Rodriguez-Galan、2013)、呼び寄せにより（Longino and Warnes、2005)、インフォーマルケアの提供と受け手としての高齢者国際移住がある。前者のライフスタイル移住は,フレイルになった時、言語の問題と滞在先のケア支援制度が十分ではないため、ボランティアネットワークのケアに頼ることが報告されている（Hardill *et al.,* 2005)。また、家族呼び寄せによる高齢者の越境は、地域から孤立することが問題とされている。いずれも越境による言語と文化の違い、さらに送り出し国と受け入れ国の高齢移民への支援の温度差は衰える高齢者の身体と精神面にネガティブに影響を与えている。

本研究では、定年後にアメリカ本土からハワイ州へ移住した４人の新 1 世のライフストーリーに焦点を当て、老後に暮らす場所の選択と課題を明らかにする。調査対象の新 1 世たちは、日本に帰国せず、これまで住んだことがないハワイ州を選択した人たちである。彼（女）たちは、厳密には国際退職移住の定義には入らない。しかし、高齢期になってからの移住、そして継続して異文化の中で暮らすことは、国際退職移住の人たちとよく似た、ライフスタイルを選択していると考えられる。そこで彼（女）たちのライフストーリーから、移住と老いる場所の選択要因と不安要素を明らかにする。

２．調査方法

本研究は、2023 年から 2024 年に断続的に合計 29 日間、ハワイ州でのインタビュー調査と参与観察データをもとにしている。調査は、オアフ島にある本願寺とコミュニティセンターのシニアクラス、日系グループ参加者、計 29 人にインタビューした。そのうち、4 名が本土からハワイ州へ移住した人たちである。インタビュー調査では、主としてアメリカへの移住の経緯に関するライフストーリー、定年後のハワイ移住、本土とハワイの暮らしの違い、医療、介護を中心に聞き取りを行った。

３.調査結果

調査から、以下の４つの内容が明らかになった。第一に、日系人社会が存在するため、安心して暮らせ

ることが移住の理由として挙げられた。アメリカ人高齢者が移住するマイアミや調査対象者が住んでいた場所は、「白人コミュニティであり違和感を感じた」とし、自身の帰属と地域コミュニティに違和感があったという。一方で、ハワイには医療機関、日系人ネットワークが存在するため、言葉の心配を軽減し、本土から移住した高齢新一世にとってハワイは、安心して暮らすことができる場所であった。第二は、ハワイは日本とアメリカ本土の中間という地理的条件から、本土と行き来可能な場所という認識であった。調査対象者たちの中には、「自分に何かあれば、すぐに本土から子どもが飛んでやってくる」距離として捉えていた。子ども世帯との距離を考慮した移住となっている。第三に、ハワイには子どもが住む、あるいは配偶者の出身地という理由で、老後の暮らしを支える親密な関係の基盤があることを挙げていた。調査対象者は家族によるインフォーマルケアを期待していないが、親戚や子ども世帯の近くに住むことは、日々のやりとりを容易にし、安心感をもたらす。第四は、退職移住の特徴である個人の選択的なライフスタイル移住という要素である。4 人とも、ハワイは天候がよく、日系コミュニティがすでに存在していることから、多様な活動の選択肢があり、アクティブに生活できることを挙げていた。しかし、オアフ島の便利な場所は、リゾート地周辺でもあり、経済的に心配な側面があることを挙げていた。

４．考察と課題

本研究の対象者である本土からハワイへ移住した 4 人の高齢新一世たちは、継続して英語圏で暮らすことを選んだ人たちである。ハワイはこれまで慣れ親しんだ場所とは違う環境であるが、日系社会が基盤となり、多様な選択肢があることから、アクティブに過ごしたいと考える彼（女）らにとって、最適な場所となっている。この点は、欧米で指摘されている高齢期の移住による孤立化には当てはまらない。ハワイは、新たな場所であるが、移住者が自分たちの帰属性を形成しやすい環境であり、彼らに安心感を与えていた。調査対象者は日系コミュニティーを通して集めたため、比較的健康な高齢者たちであった。そのため、ケアを受けながら暮らす高齢者の実情やケアに関しては、今後の研究課題となる。

参考文献

小野真由美(2020)「北から南への移動―日本からマレーシアへの国際退職移動・ライフスタイル移住」森尾昌樹・森千佳子編集『移民現象の新展開　グローバル関係学 6 』岩波書店

King, R., Warnes, A., and A.M. Williams（2000）*Sunset lives: British retirement migration in Southern Europe.* Oxford: Berg.

Hardill, I., Spradibery, J., Arnold-Bpakes, J., and Marrugat, M（2005）Serve health and social care issues among British migrants who retire to Spain. *Ageing & Society* 25,pp.769-783.

Logino,C.,and Warnes,A. (2005) Migration and Older People, in *The Cambridge Handbook of Age and Ageing,* edit. Johnson, L. Malcolm.

Sampaio, D (2020) *Migration, Diversity and Inequality in Later Life*. Palgrave Macmillan

Warnes, T（2010）Migration and Age, in *The SAGE Handbook of Social Gerontology,* edits, Dale Dennefer and Chirs Philipson.